

顕 彰 状

中村東蔵氏は 1938 年、のちに日本医科大学学長となる河野勝斎氏の三男として東京で生まれ、日本舞踊家の藤間大助を兄に、女優・日本舞踊家の初代藤間紫を姉に持つという環境もあって、幼少から藤間城太郎の芸名で、新国劇の舞台や、時代劇映画などで活躍した。映画での代表作に「神州天馬侠」(1954・55 新東宝映画)がある。四部作で、姉藤間紫のほか、のちに歌舞伎界での先輩となる三代目市川段四郎、七代目大谷友右衛門(のちの四代目中村雀右衛門)らと共演している。

1960 年からは東横ホールの公演に出演、女方を中心として、立役をもつとめた。そののち六代目中村歌右衛門の芸養子となって、1961 年 9 月歌舞伎座『加賀見山旧錦絵』の谷沢主水、『廓三番叟』の藤中で、三代目中村玉太郎を名のり、あらためて歌舞伎の初舞台を踏んだ。以後は、毎月のように歌舞伎公演に出演して、若女方を中心に、立役を兼ねて、若手歌舞伎俳優としての研鑽を積んだ。

1967 年 4 月・5 月歌舞伎座において、『根元草摺引』の曾我五郎、『西郷と豚姫』の舞妓雛勇、『本朝廿四孝』十種香の白須賀六郎、『仮名手本忠臣蔵』八段目の奴吉平、『須磨の写絵』の村雨で、六代目中村東蔵を襲名した。「中村東蔵」の名跡は、初代東蔵がのちに二代目中村歌右衛門を襲名したことでもわかるように、中村歌右衛門一門にとって重要なもので、六代目東蔵もまた、六代目歌右衛門一座に欠くことのできない人材として活躍を続けた。

1974 年には、重要無形文化財(総合認定)に認定され、伝統歌舞伎保存会会員となった。国立劇場優秀賞、国立劇場奨励賞をはじめ、眞山青果賞奨励賞(1990 年・2000 年)、眞山青果賞特別賞(1998 年)、第二十五回松尾芸能賞優秀賞(2004 年)など、多数の受賞歴がある。

中村東蔵氏の芸芸の特色は、並外れて幅広い役柄を兼ねる柔軟性にあり、しかもその幅広さが、それぞれの役々への彫琢の深さと共存しているところが、まことに貴重である。幅広い役々が、それぞれに適役として認められた本役になっており、闊達自在な台詞術と義太夫節への深い素養に裏打ちされた、芸そのものの幅広さが斯界に認知されているといえよう。

たとえば国立劇場優秀賞の受賞対象となった役々を列挙するだけでも、その芸域の広さは歴然としている。古典演目から新歌舞伎まで、時代物から世話物まで、立役から女方まで、シリアスなものからコミカルなものまで、まさに老若男女、いずれも可ならざるはなく、端倪すべからざる芸域の広さを誇っている。

とりわけ老け役をも演じるようになった 2000 年代以降は、老けの立役、老けの女方、双方を演じることのできる貴重な人材として重責を担うこととなり、ことに老け女方の大役には欠かせない歌舞伎俳優としての存在感を増した。『競伊勢物語』春日村の小よし(2003・2015 年)、『伊賀越道中双六』岡崎の幸兵衛女房おつや(2014・2017 年)など、数十年ぶりの復活上演にあたって、難役とされる老け役に指名されることも多く、まさに不可欠の存在というにふさわしい。2016 年に、重要無形文化財「歌舞伎脇役」保持者の各個認定(いわゆる人間国宝)を受けたのは、けだし当然というべきであろう。2018 年には旭日小綬章を受章している。

早稲田大学へは 1957 年に第一文学部へ入学し、文学科演劇専修に学んだ。その後、創立 100 周年記念行事として大隈講堂で九代目松本幸四郎、二代目中村吉右衛門とともに「勸進帳」を上演した(1982 年 10 月 30 日)ことが特筆される。長年にわたって早稲田大学歌舞伎研究会の活動に協力を続けているほか、演劇博物館の取材等にも、読書家として知られる一面をいかして、縦横の対応をみせている。

このような、中村東蔵氏の長年にわたる我が国芸術界における多大な功績に対して、早稲田大学芸術功労者として永くその栄誉を顕彰するものである。

2025 年 12 月 4 日

早 稲 田 大 学